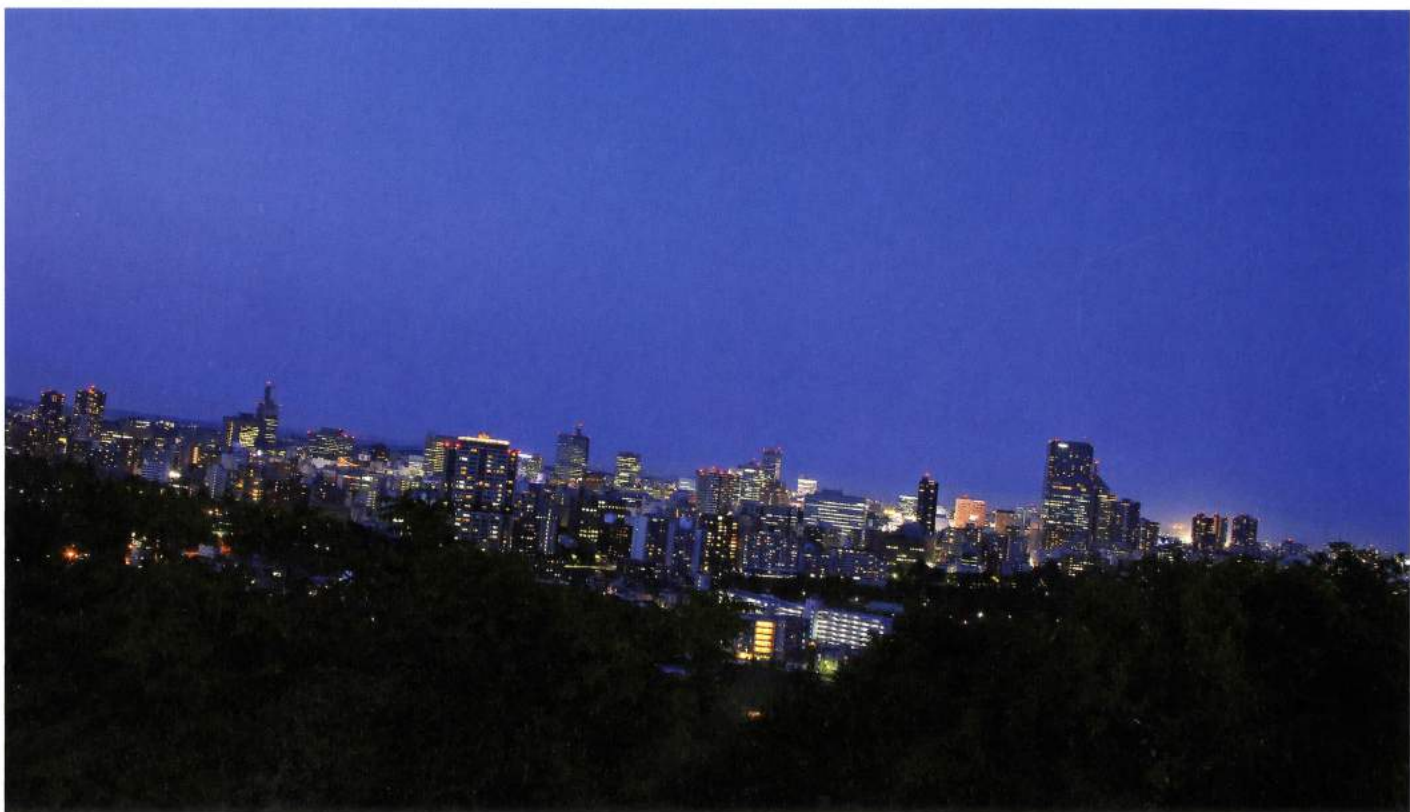


仙台文学館 ニュース

Sendai Literature Museum News



仙台城跡から見た仙台市街の夜景

人間の世界の全貌

文学のある風景

三人は松柏をわたる夜風をききながら、伊達正宗のずんぐりした白い陳腐な立像を背に、展望台の上に居並んだ。仙台全市の夜景が眼下にひらけた。広瀬川は町の手前をどす黒く迂回し、駅から広瀬通りと青葉通りを結ぶ中心部には、夥しいビルの灯火のあいだにネオンサインが煌きを移していた。市の真東にあたる太平洋の水平線は、霞と、これににじみあいまいな燈火に阻まれて、見えなかった。

三人はすっかり酔もさめて、かれらの育ってきたこの町の、腐った過去や因襲の堆積の上に、丁度巨大な魚の肌一面に吹き出した発光菌のように、きらめきわたる燈火をぼんやり眺めた。これが彼らのかつて住んでいた人間の世界の全貌だった。評定河原橋にちかく、赤煉瓦の裁判所の塔の煤けた燈、T大学の暗い建物の聚落のまばらな燈、東一番丁の螢光燈の正しい二連、そこらあたりの空に限なく廻るネオンの集積、……燈は夥しければ夥しいほど却ってさびしく、ときどき自動車の警笛がかすれてひびき、その余は皆、暗い夜の鑄型にしっかりとめ込まれていた。そして頭上には稀く雲のかかった星空が、東方に牛飼座や乙女座ののびのびとした描線をひろげていた。「やがて戦争が起るだろう」と羽黒はいつもの文句を言った。「あんな邪魔な燈りは一つもなくなくなる。そうすると星空が安心して地上へ降りて来るのだ」

(三島由紀夫「美しい星」)



三島由紀夫「美しい星」(1997年 新潮文庫)

小池 光の 気になる日本語

子規と麻央

小林麻央さんがとうとう亡くなって、日本中が悲しみにつつまれた。自身のブログを開設して、日々このことを、辛いこと、悲しいこと、うれしいこと、よろこびに満ちたことを、正直に発信し続けた。それは、ごく平明な言葉ながら、完全なまでに「自分の言葉」であり、読む者のこころを驚掴みにする迫力があつた。広い意味での「文学」の発祥の原点、現場であり、またまぎれない「詩」であつて、読んだ人は誰でも胸打たれた。

その訃報を聞いて、わたしは明治三十五年に死んだ正岡子規のことを反射的に思い出した。ふしぎなまで、この二人の生と死の軌跡は似ている。

二人とも重い病と闘病の末、自宅で家族に看取られながら亡くなった。ともに享年は三十四歳であつた。正岡子規はしばしば三十五歳で亡くなったといわれるが、これは正しくなく、正確には三十四歳と十一ヶ月の生涯であつた。ともに死の直前まで、言葉を発信し続けた。正岡子規は新聞「日本」に連載寄稿したエッセイ「病床六尺」で、小林麻央はブログ「KOKORO」で。

麻央さんの最後のブログ、この世に残した最後の開かれた言葉を、写してみる。「ここ数日、絞ったオレンジジュースを毎朝飲んでいきます。(中略)今、口内炎の痛さより、オレンジの甘酸っぱさが勝る最高な美味しさ! 朝から笑顔になれます。皆様にも、今日笑顔になれることがありますように。」

最後まで笑顔でありたいと願い、そして添付された写真は、本当に笑顔であり、読者にもその笑顔が伝わるように、祈っている。日付時間は六月二十日、午後三時十分。死はこう書いて二日後に訪れた。正岡子規の「病床六尺」には、こんな記述がある。

「人間の苦痛はよほど極度へまで想像せられるが、しかしそんなに極度にまで想像したやうな苦痛が自分のこの身の上に来るとはちよつと想像せられぬ事である。」

九月十三日に書いた。口述筆記であろう。死はそれから六日後のことであつた。結核菌が骨に入つてカリエスになり、体中に穴が開いて膿がしたたり落ちていた。苦痛激しく、ときに号泣して、しかし、最後まで書くことを止めなかった。百十五年の年月を隔ててともに三十四歳で旅立ったふたり。その日本語は生きて、残り、われらを励ましてやまない。

学芸室日記

○2017年3月24日(金)

小説『蜜蜂と迅雷』で第156回直木賞を受賞した作家の恩田陸さんが来仙し、仙台市役所での「賞辞の桶」贈呈式の後、当館にも足を延ばしてくださいました。

中学時代の2年間を仙台で過ごし、現在も市内に実家がある恩田さん。ゆかりの作家のひとりとして当館の常設展示でもご紹介しています。この日、恩田さんはスタッフと一緒に展示を見学し、お話しも盛り上がりました。

そしてこの約3週間後、同作で本屋大賞というビッグニュース



が!! ダブル受賞の快挙に、スタッフの興奮&歓喜も2倍になりました。

恩田さん、またぜひ遊びにいらしてくださいね。今後のご活躍にも期待しています!

○2017年6月17日(土)

「イラストレーター安西水丸展」(4月28日から6月25日まで開催)の関連イベントとして、「仙台俳句ing ~街なか吟行と『ガロ』のおはなし」を実施しました。

この催しは、俳句もたしなんだ安西さんにちなみ、俳人の渡辺誠一郎さんを講師に、仙台の街を歩いて俳句にまつわるスポットを見学した後、book cafe「火星の庭」で吟行会を行うというもの。当日は絶好の俳句ing日和。約10人の参加者の方々には、充実した初夏のひとときを過ごしていただ

けたようです。

最近ではテレビ番組「プラタモリ」の影響もあって、「街あるき」のおもしろさが注目されています。仙台の街を文学的な視点で歩いてみるのもオススメです!



○2017年6月24日(土)

恒例の「ことばの祭典」を開催しました。この催しは、全国的にも珍しい、短歌・俳句・川柳3部門の合同吟行会です。

今年は20回の記念として、第1回目からのあゆみと受賞作品を振り返る展示も行いました。展示

の準備のために過去の写真や記録をたどったスタッフたちは、20回という積み重ねに感慨深げな様子でした。

今年もたくさんのお客様が来館され、「遊ぶ」あるいは「耳」の題のもとに一人ひとりの思いが込められた作品を寄せていただきました。ことばを愛する皆さんに支えていただいている「ことばの祭典」。これからも末永くよろしくお願いたします。



10時に題が発表された後、館内のいたるところで作品を制作する方々の真剣な様子が見られました。

『注文の多い料理店』



『注文の多い料理店』宮沢賢治 (1924年 杜陵出版部・東京光原社)

宮沢賢治の世界と、いつごろから触れ合っていたのだろうか。改めて思い返してみても、うまく線引きできない。

賢治の名を知らない子どもの日、部屋のどこかでゴトッと音がすると、「ザシキワラスが来て

るぞ」と祖母にいわれた。風の強い日にぐずったりすると、「又三郎が来てさらっていぐよ」と母におどされた。祭になると、鹿踊りや鬼剣舞がやってくる。一番近くにある河川は北上川、はるか東には種山ヶ原が見え、空

気の澄んだ日には岩手山も遠望できた。

私の生れは一九四三(昭和18)年。場所は岩手県遠野。父親の転勤で、一年もたらずに前沢(現奥州市)へ移住。そこには小学五年生までいて、以後、高校卒業まで水沢(現奥州市)に過ごした。

奥州市に過ごした。賢治の故郷花巻とは、ほとんど陸続き。この間、郷土にゆかりのある文学者として、宮沢賢治を事あることに教えられてきた。「どんぐりと山猫」も『注文の多い料理店』も、すでに身近にあった。

けれど、風土を同じくすることは、プラスにだけはたたくわけではない。高校生になった私は、文学部(水沢高校では芸部を文学部といった)に入部。夏季の研修旅行では、啄木

の故郷浪民村へ、また賢治の故郷花巻へ行った。岩手県にゆかりのある文学者といえば、この二人。啄木と賢治で、どちらが高く評価されていたかといえば、それは啄木。賢治のほうが、なにか得体の知れないところがあり、評価が定まっていなかった。それが逆転するのは、一九七〇年代以後、つまり政治の季節が終り、新たな時代に入ってからだ。

私にとっても、賢治はつかみにくいところがあった。それほどかたでなく、詩にも童話にも方言がつきつきと出てくる。その方言の泥臭さが、どうにもこうにも苦手だった。

というのも、当時は東京こそが文化の中心、上京しなければ一旗上げられないと考えられていた。中央に対する地方の劣等感、そこを賢治の方言が逆撫でする——と感じられ、避けてさへいた。

やがて、学生生活を終えた私は、さまざまな事情で宮城県という(地方)に定住しはじめる。『注文の多い料理店』も、そういうなかの一冊。一冊ととっても、賢治が生前に刊行した童話集はこれだけだから、賢治の総体を凝縮しているとももよい。刊行されたのは、一九二四(大正13)年、賢治二十八歳のとき。部数は千部だったが、売れ行き芳しからざる(注文のきわめて少ない)本といわれてきた。



にも新しすぎ、大方の人にとって(わけのわからない)作品だったからだ。

わたしたちは、氷砂糖をほしくらゐもたないでも、きれいにすきとほつた風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

このような国籍不明の「序」がいきなり出てくるのでは、むりもない。多くの人に迎え入れられるには、時間がかかった。そしていまや、収録された九編、なかでも「どんぐりと山猫」『注文の多い料理店』は、子ども

たちの財産である。

もし、『注文の多い料理店』から二編選びなさいといわれたら、私は「水仙月の四日」「鹿踊りのはじまり」をあげる。どちらも甲乙つけがたいが、作品としての完成度からしたら、わずかの差で「水仙月の四日」だろう。

赤い毛布にくるまった男の子が出て来る。彼はカリメラのことを考えながら家へ向かうが、途中で雪婆んこの支配下にある雪童子の吹雪に遭う。「倒れてるんだよ。動いちやいないな。動いちやいないな。倒れ」といいながら、子どもを雪のな



かへ倒そうとする雪童子。倒しながら、じつは救おうとしていることを、子どもはわからない。

この息詰まる雪嵐に賢治が描こうとしたのは、他の生を奪いながらも生かす道はないかという思いであり、それが不可能

だと知るゆえに発する祈りでもあった。

「水仙月の四日」は、何度読んでも飽きない。読むたびに心がキューンと絞られる気がする。



佐藤通雅(さとう みちまさ)

1943年岩手県生まれ。東北大学教育学部卒。宮城県内の高校に国語教師として勤務する傍ら、歌人、評論家として活動。1966年、文学思想個人誌『路上』を創刊。1989年から河北歌壇選者を務める。おもな歌集に『美童』(宮城県芸術選奨)、『強霜(こはじも)』(詩歌文学館賞)、『昔話(むがすこ)』、『連灯』など。宮沢賢治や児童文学の研究、短歌論も手がけ、『日本児童文学の成立・序説』(日本児童文学学会奨励賞)、『宮沢賢治 東北砕石工場技師論』(宮沢賢治賞)、『宮村二『山西省』論』ほか著書多数。

「創作欲は衰えず」 歌人・評論家 佐藤通雅

佐藤通雅さんは宮城県内の高校で国語の教員を務められたから、短歌、評論をはじめとする幅広い表現活動をしてこられました。「河北歌壇」の選者としてもおなじみです。

佐藤さんが1966年に創刊した文学思想個人誌『路上』は、現在も発行継続中(2017年7月現在、138号まで発行)。佐藤さんの短歌作品や評論などを掲載しているほか、「招待席」と題するゲストによる寄稿のページもあります。

毎年6月に当館で開催している短歌・俳句・川柳の合同吟行会「ことばの祭典」。今年(2017年)、20回の節目を迎えましたが、佐藤さんには第1回目から短歌部門の選者を務めていただいています。

また、「仙台文学館ゼミナール」では、これまでに宮沢賢治の童話や短歌、まど・みちおなどをテーマにした講座を担当していただき、熱心な文学ファンの方々受講されています。

震災後は、被災地に住む文学者として積極的に発言してこられた佐藤さん。「目下、創作欲は衰えず、人間・世界の動向への興味も津々。歳を重ねるにつれてこれまで気づかなかった新しい発見もあります。」(『路上』第137号「ゆきしろ庵通信」)と記していらっしゃいます。これからどのような表現の世界が展開されるのか、ますます注目です。



今年の「ことばの祭典」で、作品の選にあたる佐藤さん。(撮影:佐々木隆二)



「ことばの祭典」贈賞式後、各部門の選者による講評の様子。左から3人目が佐藤さん。(撮影:佐々木隆二)



2004年に当館で開催した特別展「宮沢賢治展 in センター」のイベントでは、「賢治と東北」と題して民俗学者の赤坂憲雄さんと対談していただきました。

上橋菜穂子と

〈精霊の守り人〉展

二〇一四年、上橋菜穂子は児童文学における最高の賞である国際アンデルセン賞作家賞、二〇一五年に『鹿の王』で本屋大賞を受賞しました。多様な価値観や、文化的背景の異なる人々が織りなす世界を鮮やかに描きあげる作品は、世界的に高い評価を得ています。一九八九年の作家デビュー以来、『精霊の守り人』『獣の奏者』などのベストセラーを世に送り続ける上橋菜穂子は、創作においてはプロットを作らず、自らの内なる〈羅針盤〉の動きに合わせて壮大な物語を紡いでいきます。

本展は、代表作〈精霊の守り人〉シリーズに描かれる多文化共生を軸として、その卓越した物語世界を紹介する初めての大規模な展覧会です。シリーズ関連資料や文化人類学の研究ノート、作者が本展のために語り下ろしたインタビュー映像などで作品の魅力に迫ります。単行本の挿絵のほか、TVドラマ資料やアニメ、漫画化された作品も展示。異なるジャンルのクリエイターたちを刺激してやまない〈守り人〉シリーズへのアプローチも堪能いただけます。〈守り人〉シリーズで描かれる異世界「ナユグ」を表現した映像インスタレーションなど、見どころ満載です。

私たちの心の奥にある神話や伝承文学と同じように、ファンタジーや児童文学の枠をはるかに超えた、あらゆる世代に開かれた「本物の物語」がここにあります。日本語で書かれた、魂をゆさぶられる物語世界の素晴らしさ、面白さにぜひ触れてみてください。



中学・高校時代の上橋が実際に借りた本と、上橋の読書感想文が掲載された文集



二木真希子「精霊の守り人」カバー(複製) 1996年、偕成社



〈守り人〉シリーズ全12巻、偕成社/画:二木真希子、佐竹美保

国際アンデルセン賞作家賞メダル(2014年)

上橋菜穂子(うへはしなほこ)

作家/川村学園女子大学特任教授
1962年、東京都生まれ。オーストラリアの先住民アボリジニを研究。1989年、『精霊の木』で作家デビュー。野間児童文芸新人賞、産経児童出版文化賞ニッポン放送賞、米図書館協会バチェルダ賞などを受賞した『精霊の守り人』をはじめ、『狐笛のかなた』『獣の奏者』など著書多数。2014年に国際アンデルセン賞作家賞、2015年に「鹿の王」で本屋大賞を受賞。2016年春より、〈守り人〉シリーズがNHK大河ファンタジーとしてドラマ化。2017年11月より最終章が放送予定(主演:綾瀬はるか)。

会期 9月16日(土)~11月26日(日)
※月曜日(休日にあたる場合は開館)、休日の翌日(土日にあたる場合)および10月10日は開館、第4木曜日(11月23日は開館)
開館時間 9:00~17:00(入館は16:30まで)
会場 仙台文学館 企画展示室
観覧料 一般800円、高校生460円、小・中学生230円(各種割引あり)

夏目漱石生誕一五〇周年記念特別展

夏目漱石とその魅力と周辺の人々

平成二十九年度東北大学附属図書館企画展
仙台市民文化事業団設立三十周年記念事業



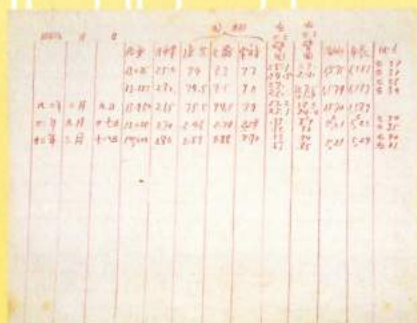
今年二〇一七年は、夏目漱石の生誕一五〇年にあたります。それを記念し、漱石の旧蔵書「漱石文庫」を所蔵する東北大学附属図書館の主催により、「夏目漱石とその魅力と周辺の人々」と題する特別展示が開催されます(主催/仙台文学館、会場/せんだいメディアテーク)。

「漱石文庫」とは、漱石の旧蔵書三千冊あまりからなるコレクション。漱石自身による書き入れや傍線がある図書が多く、また漱石の日記、ノート、試験問題などの資料も含まれています。

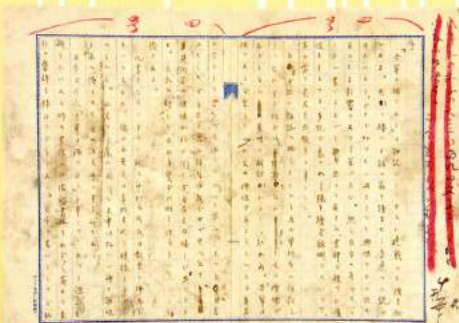
これらの蔵書はもともと東京の漱石の自宅(漱石山房)にありました。しかし一九四三年、太平洋戦争が激しくなるなかで師の蔵書を安全な場所へ移したいと、漱石の門下生たちが動き、その中の一人である小宮豊隆(ドイツ文学者)が館長を務めていた東北大学附属図書館に移管を進めたものです。受け入れが完了したのは一九四四年二月。翌年の空襲で漱石山房は焼失しますが、蔵書は仙台の地で守られ、現在に伝えられているのです。

今回の展示では、ふだん研究目的以外では閲覧することができない「漱石文庫」の資料を公開するほか、東北大学ゆかりの人々との交流などを通して垣間見える漱石の人物的魅力を紹介いたします。

短い期間の展示になりますので、お見逃しなく!



漱石自身による身長・体重・握力などを記録したメモ



「吾輩は猫である」序文の原稿

今回の展示のチラシ・ポスター図案。親しみのあるキャラクターデザインは、漫画家・春日ゆらさんによるもの。中央・夏目漱石、左から小宮豊隆、阿部次郎、土井晩翠、狩野亨吉



平福百穂の絵に漱石が詩を記した画幅。大正4~5年頃のもので、漱石最晩年の筆跡のひとつ。



岡本一平画「漱石先生」

入場無料

会期 11月3日(金・祝)~11月14日(火)
時間 10:00~17:00
会場 せんだいメディアテーク5階
ギャラリー a
(仙台市青葉区春日町2-1)

お知らせ
ブックガイドが
完成しました!

前号でお知らせしていたブックガイドが完成しました。題して「この本おすすり〜」子ども文学館えほんのひろば「お話会のみなさん+仙台文学館」。A5判、四〇ページのかわいらしい本に仕上がりました。

内容としては、「一緒に楽しむおすすめ本」「疲れた時のおすすめ本」「いつか読んで欲しい本・手渡したい本」をテーマに、当館で毎年夏休みに開催している「お話会」にご参加いただいている団体の皆さんおすすりの絵本や児童書を紹介しているほか、清水真砂



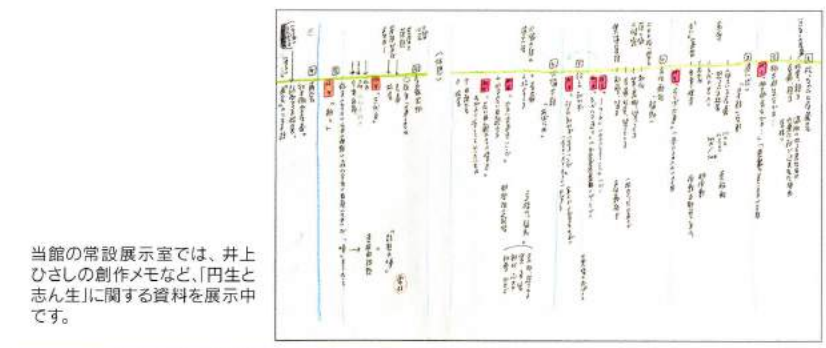
子さん(児童文学評論家・翻訳家)、とよたかずひこさん(絵本作家)、宮川健郎さん(児童文学研究者)によるエッセイも掲載しています。
このブックガイドは残念ながら販売はしていませんが、当館や仙台市内の図書館などで閲覧することが出来ます。また、当館のホームページでも見ることが出来ます。
見かけた際はぜひ手に取ってみてください。「この本、懐かしい!」という思い出の一冊、あるいは「これ、今度読んでみよう」と興味をわく未知の一冊など、さまざまな本と出会うきっかけになればうれしいです。

お知らせ
仙台では
初の上演!
こまつ座
「円生と志ん生」

ともに「昭和の名人」と謳われた落語家、六代目・三遊亭円生と五代目・古今亭志ん生。井上ひさしによるその二人の評伝劇「円生と志ん生」が、十月に仙台で初めて上演されます。
ときは一九四五年。志ん生こと美濃部幸蔵と、円生こと山崎松尾の二人は慰問興行に訪れていた旧満州・大連で終戦を迎えますが、ソ連軍の包囲により日本に帰国することができなくなり、六百日にわたって足止めされてしまいます。



その史実をもとに、性格も芸風も遠く志ん生と円生が繰り広げる珍道中を通して、囃家の生き様をえがく本作。女子修道院の院長・修道女たちと二人の珍妙なやりとりの場面に、人間にとって「笑い」とは? という根源的なテーマが織り込まれているのが井上作品ならではの。劇中で登場人物たちが歌



こまつ座第119回公演
日立システムズホール仙台&仙台文学館企画事業
「円生と志ん生」井上ひさし作 鶏山仁演出

日時 10月8日(日)開演14:00(開場13:30)
会場 日立システムズホール仙台(仙台市青年文化センター)シアターホール
入場料 S席5,800円、A席4,800円、B席3,800円、ユース(25歳以下)2,000円
※仙台文学館友の会、仙台市市民文化事業団友の会会員 S席5,500円、A席4,500円(前売のみ)
※未就学児入場不可
プレイガイド ◎仙台文学館(TEL 022-271-3020)、◎仙台市市民文化事業団(日立システムズホール仙台南、TEL 022-727-1875)、◎仙台銀行ホール イズミティ 21(TEL 022-375-3101)、藤崎、仙台三越、チケットぴあ、ローソンチケット(◎の施設では電話予約、友の会割引が可能。ユースチケットは仙台文学館のみ取り扱い)

資料紹介
島崎藤村と
布施淡の交流
〜布施淡・豊世
往復書簡より〜



布施(加藤)豊世

明治時代に仙台の東北学院の図書館として、また洋画家として活躍した布施淡と、その妻・豊世(旧姓・加藤)との間に交わされた書簡を中心とする約四百四十点の資料が、今年五月、当館に寄贈されました。これらの往復書簡は、婚約時代から結婚後までのいわばラブレターですが、注目すべきは、その中身に若き日の島崎藤村(詩人・小説家)など仙台ゆかりの文学者との交流が記されていることです。



淡が豊世に宛てた書簡。自画像も描かれている。

詩集「若菜集」や小説「夜明け前」などで知られる島崎藤村(本名・春樹)は、明治二十九年(一九〇六年)九月、数え年二十五歳のとき東北学院の作文・英語の教師として仙台に赴任しました。それ以前の藤村は、東京で女学校の教師をしていましたが、教え子への失恋や文学仲間であった北村透谷の自死、実兄の不祥事などによって失意の日々を送っていました。そこに東北学院の教職の誘いがあり、暗澹たる状況から抜け出そうと、仙台にやって来たのです。
そこで出会ったのが、同僚の布施淡です。淡は藤村の一歳年下。詩や絵のことなど共通の話題もあり、二人はすぐに親しくなりました。淡は、仙台駅前の旅館に泊まっていた藤村に声をかけ、自宅で同居を始めています。その頃、淡が婚約者であった豊世に宛てた書簡に以下の記述があります。
「去る十二日より島崎春樹と申す文士我家の客となり居れり。時々のはなしにうきをもなぐさめられて面白き時も御座候。我等の仲を熟知りたれば時々はひやかされなす。アンクリスチアンなれど一種の色ある人なり」(明治二十九年九月三十日)

やがて二人は広瀬川のそばの家に引っ越します。七室あるうち最も良い部屋は淡が使い、藤村の自室は四畳半の茶室。そこでの暮らしが淡の書簡から垣間見えます。
「島崎君は独りで先に唯一の布団でねむりに落ちれば驚かさんも心なくて座布団を衣て夜を明かさんと存候」(明治二十九年十月一日)
「島崎君と三人たぐひまれなる夕ばえの景色をながめつ、小酌を催す酒めぐり談益典に入る…すましたる藤村の顔赤きこと猿に似たり」(明治二十九年十月七日)
「帰宅後藤村君と月にうかれて出ず。渡橋を渡り旧城を横に亀が岡八幡宮に登る。月色云ばかり無くよしかつ語りかつ笑ひなどしてまた山を下り三居沢を過ぎて広瀬を渡り茶亭に憩ひ九時頃家に着く」(明治二十九年十一月二十日)
景色を愛でながら酒を酌み交わしたり、月に誘われて夜の散歩に出かけたりする楽しい様子が伝わってきます。

藤村は淡について「善良な、孝心の深い、情の厚い画工」で、「若いから話が合ふ、話が合ふからおもしろい。…旅にきて斯ういふ友と朝夕膝を交へてあ



淡が描いた藤村との散歩の様子。右(背の高い方)が淡、左が藤村。



豊世が淡に宛てた書簡には、のちに新宿中村屋を創業し随筆家としても活躍した相馬黒光の女学校時代の様子(豊世は横浜のフェリス女学校で黒光と親しかった)も記されている。